

来日迫る

サンクトペテルブルグ・フィルハーモニー交響楽団指揮者
ロシア音楽の伝統を今に伝える

ニコライ・アレクセーエフ

《スペシャル・インタビュー》



「演奏会は聴衆の皆様と一体と
なって創り上げるもの」

ニコライ・アレクセーエフ
Nikolay Alexeev

Q.. マエストロは、様々な国の多くのオーケストラを指揮されています。サンクトペテルブルグ・フィルとは20年以上になりますね。

A.. アレクセーエフ(以下A).. サンクトペテルブルグ・フィルは、常任指揮者になつて20年です。その前からも定期的に指揮していますので、オーケストラとの「付き合い」はもつと長いです。

Q.. 最初に指揮したのは、いつだったか覚えていらっしゃいますか？

A.. もちろんです。1983年です。その時のプログラムは、モーツァルトの交響曲41番「ジュピター」、魔笛の序曲、そしてオーボエ協奏曲でした。

Q.. サンクトペテルブルグ・フィルへの思い入れや、このオーケストラならではの魅力など、ぜひお話しください！

A.. サンクトペテルブルグ・フィルとは、愛情をベースにした結びつき、縁、と言いましょか。とにかく私はこのオーケストラが大好きです。レニングラード(サンクトペテルブルグ)に

生まれ育つて、この街で音楽活動ができる、この幸福に感謝しています。

私は様々なオーケストラを指揮する時、こちらには多くの愛情を注ぐとか、こちらの方がうまい、などという事は考えません。どのオーケストラに対しても、指揮台に立てば同じ気持ちで臨みます。リハーサルを通して、より良い成果、より良いコンサートになるよう、全力を注ぎます。そして、その「結果」が良いものか、物足りないかという判断は、聴衆の皆様にお任せしています。私たち(演奏する側)は全力を尽くす、その良し悪しは、聞き手の皆様の判断にお任せする、という事です。

Q.. 東京と大阪でチャイコフスキーの交響曲第6番「悲愴」を指揮されます。「悲愴」は、作曲家自身がサンクトペテルブルグのフィルハーモニー協会大ホールで初演をしていますね。

A.. そうですね。チャイコフスキーが「悲愴」を初演した当時、彼はその時代の「現代作曲家」でした。作品は聴衆にすぐに受け入れられたわけではなく、それをチャイコフスキーはとて憂っていました。初演からの帰り道、グラズノフに不安をもらした、というエピソードを聞いたことがあります。そのような雰囲気、かつてチャイコフスキーがここに居た、という「空気感」は、このフィルハーモニーホールに確かに残っています。ミステリアスですね。私たちのフィルハーモニー協会大ホールは、プロコフィエフやベルリオーズが残していった何か、シヨスタコーヴィチの「息づかい」のようなものを、今も感じることができます。それが歴史と伝統、というのなら、それは確かに残され、受け継がれています。

Q.. マエストロは、アルヴィド・ヤンソンス、マリス・ヤンソンスの両氏に師事されました。それぞれの師の思い出、特に影響を受けたことは何でしょうか？

A.. アルヴィド・ヤンソンスは、ドイツの指揮法を継承した偉大な巨匠でした。彼からは、ステージでの立ち振る舞い、リハーサルをどのように進めるのか、オーケストラのメンバーへの接し方など多くの事柄を学びました。それは、言葉ではなく、アルヴィド・ヤンソンス自身が指揮する姿から私自身が多くを学び取りました。

息子のマリス・ヤンソンスは、1982年のカラヤンコンクールに向けて、私を指導してくれました。彼は若い教師として、多くの時間を割いて、貴重なアドヴァイスを私に授けてくれました。二人とも大切な恩師です。

Q.. 日本の聴衆の印象を教えてください。

A.. とても熱心に聴いてくださっていることは、指揮をしていて感じます。聴衆に音楽が届いているか否かは、終わってからはなく、演奏している間に肌で感じています。演奏会は聴衆の皆様と一体となつて創り上げるものと私は考えています。聴衆に背中を向けていても、演奏中は常に聴衆の皆様とコンタクトをしている、そのような気持ちです。

最後に、日本の聴衆に、メッセージをお願いします！

A.. 日本の皆さんに、またお目にかかれることを今から心待ちしています！日本のすべて…聴衆の皆様のこと、日本の文化も、街の様子も、本当に惹かれます。4月の再会を心から楽しみにしています。

演奏会 レビュー

名匠アレクセーエフ 新日本フィル(2020年2月15日)を指揮

今年4月来日のサンクトペテルブルグ・フィルの指揮者として、テミルカーノフと共に日本公演を指揮する、ニコライ・アレクセーエフ。

4月の来日に先立ち、2月15日にサントリーホールで新日本フィルを指揮して、チャイコフスキーのスラヴ行進曲、シヨスタコーヴィチの交響曲第6番等を披露しました(アレクセーエフは以前、新日本フィルを指揮してシヨスタコーヴィチの交響曲第7番「レニングラード」を上演しており、今回はそれに続く同団への指揮者としての登場となりました)。

その音楽創りは古き佳きロシア音楽の香りを今に伝える「名人技」「職人技」と呼ぶにふさわしいもので、大仰な表現や、奇をてらった作り込みは皆無ですが、ひたすら実直に楽譜に向き合い、作品が持つ本来の輝き、ロマンティズム、壮大なスケール感を実に自然な形で描き出すのが特徴です。

この日のプログラム、チャイコフスキーのスラヴ行進曲の冒頭から漂う濃厚なロシア的色彩や、シヨスタコーヴィチ交響曲第6番の透き通ったハーモニー、更に同曲の楽章が進むにつれて速まるテンポと複雑さを増してゆくオーケストラの各パートを的確にコントロールし、フィナーレにオーケストラを最高潮に響かせ、さすがの「匠の技の冴え」を堪能させてくれました。

聴衆からの熱い拍手と歓声と同時に、オーケストラの楽員からも共感を持って拍手を受けていました。

アレクセーエフは、ロシアの伝統に根ざした音楽表現と、豊かな指揮経験に裏打ちされた、その「堅固な」指揮スタイルを持ち味としており、決して「汗だく」の「大振り」はしませんが、透徹したピアノシモから劇的な大音量まで、聴衆はその安定した指揮のもと、作品の真の魅力に触れる事が出来る指揮者、と言えるでしょう。

4月にサンクトペテルブルグ・フィルを指揮するプログラムは、ロシア(殊にベテルブルグ所縁)の作曲家の傑作3作品がズラリと並び、まさに本国ロシア最高のオーケストラによる、ロシア音楽の醍醐味が堪能できる名曲プログラムが披露されます。

平日のお昼時、ご来場頂いたお客様には、音の名職人「アレクセーエフ」が誘う、華麗で美しい、ロシア音楽の世界をお楽しみいただけるに違いありません。



サンクトペテルブルグ・フィルハーモニー交響楽団

指揮：ニコライ・アレクセーエフ

2020年4月23日(木) 14:00(13:20開場)

東京オペラシティ コンサートホール

プロコフィエフ：交響曲第1番ニ長調「古典」Op.25

ストラヴィンスキー：バレエ組曲「火の鳥」(1919年版)

チャイコフスキー：交響曲第6番「悲愴」Op.74

S¥15,000 A¥13,000 B¥10,000 C¥8,000

指揮：ユーリ・テミルカーノフ

ピアノ：藤田真央

2020年4月21日(火) 19:00 サントリーホール

チャイコフスキー：歌劇「エフゲニー・オネーギン」Op.24より「ポロネーズ」

チャイコフスキー：ピアノ協奏曲第1番変ロ短調Op.23(ピアノ：藤田真央)

ムソルグスキー(ラヴェル編)：組曲「展覧会の絵」

S¥21,000 A¥18,000 B¥15,000[僅少] C~D売切

《お申込》 [ジャパン・アーツぴあ 0570-00-1212](http://japanarts.co.jp) www.japanarts.co.jp [ジャパン・アーツ](#)

指揮：ユーリ・テミルカーノフ

ピアノ：エリソ・ヴィルサラゼ

2020年4月20日(月) 19:00 東京文化会館 大ホール

プロコフィエフ：交響曲第1番 二長調「古典」Op.25

シューマン：ピアノ協奏曲 イ短調 Op.54 (ピアノ：エリソ・ヴィルサラゼ)

ムソルグスキー(ラヴェル編曲)：組曲「展覧会の絵」

S¥19,000 A¥15,000 B¥12,000 C¥10,000 D売切

(問) 都民劇場 03-3572-4311

指揮：ユーリ・テミルカーノフ

ヴァイオリン：セルゲイ・ドガージン

2020年4月24日(金) 19:00 文京シビック 大ホール

チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲 二長調 Op.35 (ヴァイオリン：セルゲイ・ドガージン)

チャイコフスキー：交響曲第5番 ホ短調 Op.64

S¥15,000 A¥13,000 B¥11,000 C~D売切

(問) シビックチケット 03-5803-1111

<その他の日本公演スケジュール>

4/17(金) 福岡シンフォニーホール (問) 092-725-9112

4/19(日) 熊本県立劇場コンサートホール (問) 096-363-2233

4/18(土) ザ・シンフォニーホール (問) 06-6453-6000

4/25(土) 愛知県芸術劇場コンサートホール (問) 052-241-8118